

洛中洛外図屏風の骨格

藤原重雄 (東京大学史料編纂所)

1、「洛中洛外図屏風」とは

屏風（六曲一双）に都市京都の内外を絵地図的に描いた作品。
室町時代後期・戦国時代の作品（初期洛中洛外図屏風）が若干、
江戸時代の作品（第二定型）が多数。約200点？
小画面の扇面・画帖、補完関係にある洛外図屏風・東山名所図屏風など。
→室町・戦国期にかかる作品から、画題の成立・祖型を考える。

2、初期洛中洛外図屏風の諸本

国立歴史民俗博物館甲本（歴博甲本、町田本、三条本）
：大永度将軍義晴御所（1525年落成）を描く。
東京国立博物館模本（東博模本）
：江戸時代の狩野派絵師による淡彩での模写。一扇分欠失。
天文十年代（1540年代末～50年代）の景観。
米沢市上杉博物館本（上杉本）：永禄八年（1565）、狩野永徳筆。
歴博乙本（高橋本）：上杉本よりも降る時期、天正年間（1570・80年代）か。
実態からの距離を感じさせる。
文献上の初見？：『実隆公記』永正三年（1506）十二月二十二日条
甘露寺中納言来、越前朝倉（貞景）屏風新調、一双画京中、土佐刑部大輔（光信）新図、尤珍重之物也、一見有興、

3、歴博甲本の構図と景観構成

六曲一双（雙）。右隻・左隻（向かって／作品本位）。東隻・西隻。
方角と四季との対応。四方四季。[東・春→南・夏]+[西・秋→北・冬]
画面の上1/3ないし1/4に背後の山々、洛外の名所。東山、北山・西山。
画面の下2/3（大部分）を占める京中の市街地が中心的な画題。
応仁・文明の乱（1467～77）後の縮小した都市構造：構（防御施設）で囲まれた上京・下京の二つのブロックを、南北行の室町小路が結ぶ。双子形。
屏風一双の構成と現実の都市構造とは、直接対応していない。
内裏は上京に位置し、周囲の市街地も併せ描く。内裏を東隻に描き込むために、南北方向の距離を圧縮する。
公家（内裏様）／武家（公方様・細川邸）の対の構成。
なかでも整然とした西隻の市街地（武家の領域）を描くことに意図。

4、都市基点としての一条室町

歴博甲本の市街地部分の東隻・西隻への振分け。

東西では、室町小路から町小路が軸線となる街路の下端。

南北は一条大路。平安京城内（一条大路より南）と洛外を区別する意識。

両隻で重複する部分あり。左右に描き分ける際の扇の要。

「一条辻」「一条札辻」：一条室町の交差点。行列に際しての儀礼的地点。室町殿の惣門？

版本京都図の里程表記：「新撰増補京大絵図」貞享三年（1686）版・元禄版

「一条札辻ヨリ方々へ道之程／大津へ三里…」

→無刊年版・寛保元年（1741）版「京三条大橋ヨリ…」

道路基点・高札場の認識。象徴的な都市把握の基準点。

5、想定される祖型—将軍御所の変遷—

公武の対比が構図の根幹。左右隻の構成上のバランス。中心モチーフ。

歴博甲本：東ハレの大永度御所を正面から見せる。屏風祖本の図様。

上杉本：西ハレの室町殿。背面を見せる格好。画面の下端。

屏風段階での構図としては、アンバランス過ぎる。

歴博甲本より以前に用いられた主要な将軍御所のうち、小川御所の位置は屏風の両端に重心（内裏—将軍御所）のある配置となって収まりがよい。

小川御所の時代（小川御所を公方様として描きたい意向の下）に初発的な作品が成立。義政（1490 没）・義尚（1489 近江にて没）・日野富子（1496 没）。

→他の要素を勘案すると、もう少し降り、細川政元（1507 没）の時期？

付、歴博甲本の犬馬場と能舞台—描かれた行事の場—

【参考文献】

- * 藤原「洛中洛外図屏風の祖型を探る—京中図を描く視点—」
（京都文化博物館編『京を描く—洛中洛外図の時代—』2015年）
- * 藤原「洛中洛外図屏風の祖型を探る—行事図像の理解：歴博甲本の能舞台—」
（『中世文学』68、2023年）
- * 藤原「歴博甲本「洛中洛外図屏風」に描かれた犬馬場—位置比定の再検討—」
（『芸能史研究』246、2024年〔2025年刊〕）
- * 泉万里『洛中洛外図屏風 歴博甲本 絵になる都』（中央公論美術出版、2025年）
- * 山田邦和「室町幕府将軍御所の変遷」
（仁木宏編『中世武家拠点の形成』高志書院、2025年）
- * 藤原《『洛中洛外図屏風』文献目録》Web